

今回タイトルは、作家・池澤夏樹のメール・コラム「新世紀へようこそ」98号「戦争が始まった」(3月20日)の文末文章の引用である。『赤旗』(3月23日)からの孫引きだ。私も、この『赤馬通信』の欄を借りてアメリカのイラク戦争に反対する文章を綴りたい。

ちょっと前に、ビデオ屋の西部劇の棚からアメリカ映画『ジョロニモ』を借りて観た。全労協系の全国一般労組＝ユニオン北九州のニュース(43号)が「歴史に学ぶ“団体交渉術”北米アパッチ族の英雄」との題目で紹介するのに興を引かれてである。それに「フレンチコネクション」でマルセーユを走り回るアメリカ人刑事を演じたジーン・ハックマンや、「ゴッド・ファーザー」でファミリーの知的番頭役をやったロバート・デュバルといった好きな俳優が出ているということもあった。自由とか平和とかの美辞を述べながら冷酷な殺害行為を行う現在のアメリカの世界帝国ぶりは、19世紀の国内インディアン狩りからつながるものだと感じさせる場面が折々に描かれる。最後のクレジット・タイトルは、投降したジョロニモらのアパッチ戦士をフロリダの収容所へ送る列車の風景と共に流れて行く。この西部の荒野の描写が素敵だ。画面の左側を列車は煙を吐きながら手前からずっと奥の方へ次第に小さい像になりながら走っていき、はるか遠くなった所で右に曲がって画面を横断する姿になる。私はこの列車の線路の行き先に1945年3月10日の東京、8月の広島、長崎、そして朝鮮戦争時の平壤、ベトナム戦争時のハノイ、さらにアフガン、イラクをイメージした。

平壤やハノイの空爆を基地提供で支援した戦後日本の支配者は、いままた給油や情報提供を行う軍艦をペルシア湾に送ってアメリカの軍事作戦を支援している。彼らは国内の反戦運動の高まりを洩面で見ながら、有事立法での取締りを構想しているのである。

マスコミはそうした支配層の意識を基調にしながらかし反戦の庶民意識も時には折り込んでの報道姿勢だ。NHKの当局御用的姿勢が著しい。「フランスはかたくなな姿勢を変えようとしてません」と言ったアナウンサー。イラク武力攻撃の姿勢を変えようとしないアメリカはかたくなではないのかと反発していたところ、イラク攻撃を批判する『毎日』の論評でも「フランスや中間派6カ国のかたくなな姿勢も「誤算」だった」との表現が使われている(3月21日「なぜ今…イラク攻撃と世界4」)のを見た。『毎日』22日夕刊はトップ見出し「本格空爆 イラク政権崩壊の兆し」の記事本文で「フセイン政権は自壊の兆しも見せ始めた」と書く。空爆による崩壊は「自壊」ではないでしょう！

他方、こういうこともある。春分の日、萩往復ドライブの折りにクルマの中で聞いていたFM山口放送が「春ぢゃねー」との山口弁(男女共通の表現 このぢゃはぢゃとぢゃの中間音で発音)を頻発しながら流す音楽の中に、桑田佳祐「ロックンロールヒーロー」があった。「今の時期だからこそ、この歌詞が意味することをちゃんと考える必要があると思います」との視聴者の注文に応えての放送である。CD(WJCD0024)の歌詞カードから数句紹介しておこう。「アメリカは僕のHero 安部(まも)っておくれよLeader 国家(くに)を挙げての右習え 核なるうえはGo with you 暗い過去も顧みずに ついて行きましょう 一度は僕らもHero 後は修羅場だ…」しかし「ついて行かない」人のデモが、世界の反戦の流れに沿って今漸くこの日本でも万の規模でそして高校生まで参加する形で行われるようになった。そこで私も再度叫びたい。「戦争が始まりました！戦争に反対しましょう！」(03.03.23)